

情にまみれたマラソン代表選考

盛田 常夫

第130回芥川賞の選考でもそうだったが、アテネオリンピックのマラソン代表の選考でも何か割り切れないものを感じたのは私だけではないだろう。ともに、絶対的な実力ではなく、やや皮相な相対的な評価で決まったという感じを否めない。選考が難しいことは理解できる。しかし、以下に論じるように陸連の選考にも説明にも一貫性がない。にもかかわらず、専門委員会の決定は9対1、その後の理事会でもほとんど議論なしに原案が承認されたというのも、理解しがたい。公にされていない別の理由や動機があったのではないかと勘ぐられても仕方がないだろう。

男女で異なる選考論理：油谷選考は基準逸脱

男女とも、一番手の選出については妥当だろう。規定によって、野口みずきは世界選手権でメダルを取った時点で内定しており、国近友昭も2時間7分台で選考対象レースを制しているから、この二人の選出に異議はない。

問題は二番手の選出である。専門委員会が第二手に推薦したのは、男子の油谷と、女子の土佐である。ここで専門委員会は男女で異なる論理を適用した。

男子のタイム順でいけば、福岡で2位につけ、自己ベストの2時間7分55秒で走った諏訪が推されてしかるべきだが、世界選手権で5位入賞の油谷を推した。その理由は、「2度の世界選手権で5位入賞という過去の実績」である。パリの世界選手権でのタイムは、2時間9分26秒である。メダルを取れなかったため、油谷は内定を受けていない。にもかかわらず、彼は以後の選考レースを回避したが、専門委員会は何故か第二位で推薦した。事実上の世界選手権メダリスト扱いである。第二推薦とはいえ、この決定は選考規定を逸脱するものと言われても仕方がない。もし千葉真子が大阪を走らず、世界選手権の成績だけで選考レースを見送っていた場合のことを考えれば良い。5位の油谷を推し、3位の千葉を外すことができただろうか。油谷の選考レース待機戦術は、どうみても不可解。すべてのメディアは高橋落選だけを取り上げているが、男子の選考は高橋外し以上に不可解なのだ。油谷が二番手に推されたことで、トラックの長距離種目のすべてに日本記録を保持し、マラソンの日本記録も保持する高岡推薦の芽がなくなった。なぜなら、直接対決で高岡は諏訪に負けているから、高岡外しを正当化できるからである。

女子のタイム順でいけば、選考の二番手に土佐が推されてもおかしくないが、ここからが「専門委員会」の仕事になる。異なるレースの結果をどう評価するのか、選手の絶対的な実力を推し測りながら、考査するのが委員会の仕事である。ところが、この段階で、委員会はいとも簡単に、選考レースで一番のタイムを出したから、土佐を二番手に推薦した。選考対象レースのタイムだけを比較するなら、「専門家」など不要ではないか。質の異なる

レースのタイムを比較考量しなければならないから、専門委員会があるのではないか。ここ 2 年、ほとんどレース結果がでていない土佐が選ばれるとすれば、最低でも、名古屋の高橋の大会記録を破ることが最低条件だし、ほとんど無風だった条件を考慮すれば、2 時間 22 分を切るタイムでぶっちぎる必要があったはず。24 分をわずかに切る程度のタイムで、どうして二番手に推されたのだろうか。

このように、男子と女子では、二番手の代表選出で異なる論理が使われ、かつその選出の論理は明快さを欠いている。にもかかわらず、この選定結果に誰も異議を唱えなかったのは奇妙としか言いようがない。この二番手の選出によって、女子の高橋と男子の高岡という日本が誇る世界のスーパースターが、事実上、推薦リストから漏れてしまった。

世界選手権の教訓と情に流された土佐選出

昨年の世界選手権（パリ）の女子マラソンをテレビ観戦した人は多いだろう。野口、坂本、千葉の日本人 3 選手とケニアのヌデレヴァの戦いだった。このレースではっきりしたことは、30 キロ過ぎてからのヌデレヴァのスパートに、日本選手の誰一人も付いていけなかったという厳然たる事実である。実力者ヌデレヴァの走りを見て、これは格が違うと感じた人が多いはずだ。満を持してスローペースに甘んじていたヌデレヴァがいったん仕掛けた後は、わずかに野口だけが諦めずに最後まで追いかけたが、後の二人はすぐに姿が見えなくなった。

このレースが示すように、野口と世界のトップとの間には何人も否定できない差がある。坂本や千葉との差は埋めようもないほどだ。これは基本のスピードの差である。あのレースを見て、やっぱり高橋でないと世界では戦えないと感じた人は多いはずだ。要するに、2 時間 20 分を切るスピードをもっているランナーとそうでないランナーとの戦いは勝負にならない、という現実を見せつけたのが昨年の世界選手権だった。

陸連の専門委員会も、今回の選考にあたっては、最後の 7 キロあるいは 5 キロのスピードを比較しながら、最後まで勝負できるという判断を優先したという。多分、世界選手権からの教訓だろう。そして、最後でスピードアップできた土佐や坂本を高く評価し、ブレークした高橋を低く評価した。しかし、レース条件や全体的なスピードを考慮せず、最後の 5 キロだけを比較しても意味がない。30 キロまでトップスピードで走りながら、そのスピードをどこまで維持できるかが、ランナーの絶対的实力であるはずだ。この観点からいえば、最近の実績のない土佐が絶対的实力を示すためには、少なくとも高橋の大会記録を上回り、さらに今回のような最高の気象条件であれば、22 分を切ることを推薦条件だったはずだ。

土佐が頑張ったことは間違いない。しかし、最高の条件の中で 24 分に近い 23 分台だ。しかも、これが彼女の現在の目一杯の力だ。これでは世界のトップとは闘えない。「逆転劇」というが、直接対決で高橋を逆転したならともかく、自己ベストが 28 分台の無名の田中選手を逆転したにすぎない。にもかかわらず、「涙の逆転劇」、「これだけ頑張っても選出されな

ければ、何をすれば良いのか」(鈴木監督)という浪花節が、レース観戦者に印象づけられた。その「逆転劇」の興奮が冷めやらないうちに開催された専門家委員会は、これで土佐を選出しなければ「逆賊」呼ばわりされるとでも考えたのだろうか。比較できないはずタイムを単純比較して、土佐のタイムが一番良いからと二番手に推薦した。素人が判断したような、何とも非専門的な選考だ。小出監督でなくとも、「専門家の方がお決めになったことですから」と嫌みの一つも言いたくなるだろう。専門委員の諸氏は、本当にこのレベルで土佐が世界で闘えると判断したのだろうか。

高岡が外れた理由

過去の実績を考慮するなら、油谷ではなく、高岡だったはずである。高岡が外された理由は、国近、諏訪の直接対決に敗れたという 1 点だけだ。油谷は選考レースに出ていないから、このリスクを負わなかった。タイムだけから見れば、福岡を走った 3 名をそのまま推薦する方法もあったし、油谷選出の論理を適用するのなら、油谷より高岡の実績を評価すべきだし、諏訪と高岡の福岡の 4 秒の差は過去の実績から無視できるものとして高岡を推薦することもできた。

多分、専門委員の間では、高岡は最後の勝負に弱いという判断が働いたのだろう。シカゴで日本記録を樹立した時も、世界最高記録でゴールするところを、最後にブレークしてしまった。同じような光景が福岡のレースで再現されたのが痛かった。しかし、諏訪や油谷にあのシカゴでの高岡の闘いを求めることができようか。そのことを考えれば、高岡の方がはるかに世界で闘える力があることは明らかだが、専門員の「初めに油谷ありき」という予断なしに、今回の油谷選考を理解することは不可能だ。

高橋外しへ動いた要因

高橋が外された背景には、いろいろな要因が働いているだろう。専門委員会で高橋支持が小掛副会長一人だったという事実は、何を物語っているのだろうか。言うまでもなく、小掛副会長は陸連の実力者である。これまで、マラソン選手の選考やオリンピックのレース準備について、直接に指示を下していた人物としても知られている。陸連トップの中の確執、つまり小掛副会長と帖佐副会長との間の確執が専門委員にも影響を与えたのではないか。つまり、小掛氏が高橋を支持すればするほど、逆に動くベクトルが働いていたのではないか。

現場に近い専門家たちは、小出監督と良い関係にはないだろう。それぞれ競争相手だから、仕方がない。以前と違い、それぞれの監督は名匠のような存在になっており、陸連の専門家が直接、監督にものを言える状況になっていない。とくに小出監督の場合には高橋だけでなく、有森裕子も育てた実績があるから、陸連が口を出せる関係にない。その小出監督が、東京国際の後、いろいろな機会を通して、陸連の選考を牽制するような発言をおこなってきた。そのことに、現場の監督は不快感を持っていただろうし、陸連の幹部や専

門委員も自らの立場を否定されるような発言に快く思っていたはずがない。だから、「機会があれば、一泡吹かせたい」と考えていた人々がいても不思議ではない。土佐の「逆転劇」でこの感情が勢いを得たのではないか。そうとでも考えなければ、異なる選考レースの単純タイム比較という「素人判断」を下した専門家委員会の決定を理解することは難しい。あまりに情に流された判断と言わざるを得ない。この組織のこの委員会は、本当に世界のトップと闘う選手を選ぶという意識を持っていたのだろうか。

基準は明瞭？

陸連理事の増田明美や山下佐和子は、今回の決定を選考基準に沿う、当然な結果だと述べている。メディアなどの識者の感想も、「過去の実績にとらわれることなく、選考基準に沿った選考で明瞭だ」とするものが多い。これは単純にタイムを比較する「素人」の感想で、選考基準はそのような規定になっていない。「各選考競技会の日本人上位の競技者の中から本大会でメダル獲得または入賞が期待される競技者を選考する」というのが、唯一の基準である。かなり裁定の幅を持たせた規定である。異なるレースのタイムを速い順に並べて、上位から選出するなどとは書いていない。各レースの比較が簡単でないから、専門委員会が存在する。ところが、その専門委員会が実質的におこなったのは、女子では単純なタイム比較、男子では実績評価による油谷選出だった。誰が見ても恣意的であり、とても明瞭な判断とは言えない。

今更どうこうなるものでもない。高橋はもう十分にマラソン・レースを満喫したはずだ。オリンピック金メダルはすでに手中にある。女子で初めて20分を切り、世界記録も作った。無敵のラドクリフだってアテネ五輪で勝てるとは限らない。そう考えれば、これからは楽しみながら走り、賞金レースでお金を稼ぎ、後の人生設計をした方が良い。高岡もそうだろう。

アテネでは、野口と坂本は期待できそうだ。最近の仕上がりが良さそうだし、若い分だけ、まだまだ伸びる可能性がある。残念ながら、土佐は今以上の力を発揮できないだろう。野口や坂本にはメダルや入賞の期待はかかるが、土佐は10位以内に入るのも難しいと思う。それもこれも「専門家」がお決めになったことだから、部外者が騒いでも仕方がないだろう。後は怪我をせずに万全の態勢で、本番で最高の力を発揮してもらいたい。ラドクリフやヌデレヴァだって、100%の状態のアテネのスタートラインに立てるとは限らないのだから。

だが、それにしても陸連の専門委員会はもっと説得力のある論理で、緻密に説明できるようにして準備してもらいたかった。世界のスピードレースを経験していない土佐を選び、日本が世界に誇る数少ないスターを外すなら、強靱な論理が必要だったはずだ。日頃のブレーンストーミングはもちろん、委員会や理事会で自由に物が言えるような環境に組織を変えて行く必要もあるのだろう。異議や議論のない組織なんて、存在意義がないではないか。